

# 1\_WALL

第8回写真「1\_WALL」展

2013年3月25日(月)～4月18日(木)

公開最終審査

2013年4月4日(木) 6:00p.m.～9:00p.m.

FINALISTS ※五十音順

荒木梨穂 宇田川直寛 黒田菜月 福田晋也 松本明 涼市

Grand Prize REPORT  
Photography

第8回写真「1\_WALL」グランプリ

## 黒田菜月 | Natsuki Kuroda

「1\_WALL」の審査の流れの中で成長した作品で、  
見事グランプリに！

幼少期、幼児期にあたる少年たちを追うことで、彼ら独特の世界との接し方を捉えようと写真を撮る黒田さん。展示作品では、ポートフォリオから5点の作品を厳選し、シンプルに配置することで、より強く自分のメッセージを伝えようと試み、審査員から注目を集めました。



黒田菜月 Natsuki Kuroda

1988年生まれ。

中央大学卒業。

### 審査員コメント ※五十音順、敬称略

秋山伸 (グラフィックデザイナー・パブリッシャー)

「ポートフォリオで見た時はピンと来なかったが、プリントの品質が大きく向上した展示作品を見て引っかけができた。全てのプリントがこの品質となった状態を想像しながらポートフォリオを見直すと期待がわいてきた。」

鈴木理策 (写真家)

「少年は正直という、ある種の理想を求めているからこそその素朴さであり、同時に“ゆるさ”でもある。けれど、写真を撮る行為は何が起こるか分からないところが面白い。カメラを持って外に出よう!というメッセージを込めて。」

土田ヒロミ (写真家)

「シンプルで素直でいいが、被写体である少年たちの生態をおもしろがるだけでなく、異性としての対象意識も持って取り組めば、更に深まって伸びて行くと思う。」

姫野希美 (赤々舎代表取締役・ディレクター)

「本人が思っている以上に、写真には可能性がある。黒田さんはまだ発展途上ののだが、写真という混沌とした器の中で作品づくりをしている。人を真摯に撮ることから始めようとしている姿勢には伸びしろを感じる。」

増田玲 (東京国立近代美術館主任研究員)

「シンプルな展示にしたことで見る人が考える余地がでてきた。ポートフォリオ審査を経て、壁面に展示するという『1\_WALL』の流れの中で成長してきた。一年後の個展を見てみたい。」

## 受賞作 「水辺の子ども」

自分と世界の間を体感していた頃、なぜあんな思い込みをしたのか分からないことばかり。でもみんな、子どものときに起こした小さな事件をどこかに抱えながら生きている。“なぜ写真を撮っているのか”“自分は何が好きなのか”を考え抜き、その答えをこの展示でしっかり伝えたい。



**1** **黒田菜月** Natsuki Kuroda  
「水辺の子ども」



少年には周りの世界に全力でぶつかっていく過程の瑞々しさや衝撃がある。そこに憧れて撮影したいと強く思った。彼らが何を考え、見ているのか、その答えを探して、繰り返し写真撮影を行っている。写真とは何か？ 見る人に一枚の風景の中から何かを感じてほしい。

〈質疑応答〉

- 菅沼:『水辺の子ども』というタイトルで、なぜ、少女ではなく少年なのか？
- 黒田:きっかけは、少年である二人の兄弟が登場する本を読み、彼らの行動に憧れて。
- 秋山:当初の展示プランでは演劇的な演出があったが、実際の展示でシンプルにした理由は？
- 黒田:余分なイメージを削ることで私が伝えたいメッセージを強く届けたかった。
- 土田:少年との関係性を撮る場合に、少年の中に内在する男性性は考えなかったの？
- 黒田:少年たちが生き生きと動きまわっている自然との関係性を重視した。



**荒木梨穂** Riho Araki  
「家」



生まれてから32年間、同じ家に住んでいる。父、母、姉、私の四大家族で住んでいたが、父と母が外へ出て、現在は姉と私の二人のわが家。物が増殖し続けているが、すべてがそこにあるべくしてあるように思える。そんなわが家が愛しくて、今後も撮り続けていきたい。

〈質疑応答〉 ※体調不良により電話にて参加。

- 秋山:前の作品では外の世界に積極的に関与して制作していたけど、外から内へと指向が変わった理由は？
- 荒木:街も家も最初は定点観測のような撮影だった。この作品では視点を変えてみた。
- 増田:展示は細部まで見てほしいと言ったが、ポートフォリオではその意識は？
- 荒木:ポートフォリオを雑多な感じにしたのは、キレイ過ぎると、のめり込んで見てもらえないと思ったから。



**涼市** Shantel Liao  
「まだ無名の風景」



大学で舞台美術を勉強した。写真を撮る場合も舞台性を意識して撮影している。台湾の南の街で行われるお祭りの風景の写真を、舞台のように展示しようと考えたが、情報過多にならないように意識した。異邦で暮らす日々へ故郷を思うように、舞台を見るように、私は島の写真を撮り続ける。

〈質疑応答〉

- 鈴木:なぜ、展示スペースではベッドの上に写真を展示したの？
- 涼市:自分が留学していた時の、異邦で故郷を思う気持ちを、ベッドを置くことで表現したかった。
- 土田:左上のスペースが空いていて、下のベッドへ作品が崩れ落ちているように見えるけど、意図的な表現なのか？
- 涼市:そういうわけではない。整理出来ていない印象もあるかと思うけれど、私はそれでいいと思う。



**2** **福田晋也** Shinya Fukuda  
「A sign of repetition」



写真を撮ることで失われた情報を再び写真に表出させることがテーマ。例えば岩を撮るとき、存在の大きさが自分を軽々と越えていく。しかし撮った写真には、その場で感じたことまでは写らない。何か別の物に変換されたものまで一緒に見ようとするのが大切だと思う。

〈質疑応答〉

- 菅沼:そのテーマを表現するときに、なぜ、被写体が岩なのか？
- 福田:テーマが先にあるのではない。神々しいものを撮りたいと思い、岩を撮った。
- 鈴木:どこまで写真にこだわる部分を残そうとしている？
- 福田:写真に写らない部分がある、ということに対して否定的な訳ではなく、一枚の写真の強さをもっと高めた。



**3** **松本明** Akira Matsumoto  
「RADAR」



様々な関係性の中で僕たちは物を見ている。世界の新しい見方を獲得するために現実世界から遠く離れた場所へ意識を持っていきたい。そのためには探査機のように自らを機械化して世界と向き合うことが必要だと思う。撮影を通して写真の中に新たな世界を再構築していきたい。

〈質疑応答〉

- 土田:世界を再構築するということだが、カメラが探査機になるの？
- 松本:カメラではなく、撮影する僕自身が探査機になる。
- 鈴木:撮影する前にカタチを決めると言ったが、それをどうやって決めるの？
- 松本:自分の中にストックはあるが、撮影現場では無意識に撮る。



**4** **宇田川直寛** Naohiro Utagawa  
「図」



“私とは何か？”という問いは、私にとって大事な問いである。この大きな問いの概念を何か別の物に置き換えて写真に撮る。置き換え作業を突き詰めていくと、全く関係のないものに辿り着く。写真に何が写っているかは大切ではなく、写真の存在自体が問いの象徴である。

〈質疑応答〉

- 土田:展示した蛍光灯により生じる明度の違いは写真を見せる際の障害にならないの？
- 宇田川:私の写真は何が写っているかは重要ではない。照明でひとつの空間性がつくれると思った。
- 姫野:あなたの作品づくりを考えたとき、この作品はどこまで行けば完成するの？
- 宇田川:どこで完成するかは自分でも難しいと感じている。作品づくりのプロセスのほうが好き。



## ■ 審査員の感想

ここからはガーディアン・ガーデンの菅沼の進行で、ファイナリスト一人一人に対する感想を聞いた。



● **黒田さんの作品について。** 姫野さん：「今日の展示を見て、プレゼンを聞いて、だんだんこの写真がいいなと思いはじめた。本人が思っている以上に、黒田さんの写真には可能性がある。土田さん：「プレゼンの段階でセクシャルな表現について説明されなかった。少女ではなく少年の写真であることを意識していくといいのでは」。鈴木さん：「展示作品の中に同じ被写体の写真が2枚あるが、そのどちらを展示すべきか選べない“ゆるさ”がある。ある意味、伸びしろがある人」。秋山さん：「好きな展示作品。この展示を見てポートフォリオを見直したら、印象が変わった」。増田さん：「ポートフォリオでは構成に凝り過ぎて伝わりづらかったが、シンプルな展示にしたことで見る人が解釈できる余地が出てきた」。

● **福田さんの作品について。** 秋山さん：「空間構成はうまい。フレーミングのバランスもいい、プリントもいいのだが、やろうとしていることはあまり面白いとは思わない」。鈴木さん：「この作業をするんだったら、写真はせっかく上手なので写真にもっとこだわったほうがいい」。増田さん：「撮影することでほれ落ちるものを拾う手法は70年代にいろんな人がやっている。新しい表現方法だとは思えない」。姫野さん：「展示作品よりも最初にポートフォリオを見たときの方が鋭さ、問題意識がダイレクトに感じられた」。土田さん：「表現者として才能がある人。それゆえに表現を壊したいという欲求が出てくるのだということも理解できる」。

● **荒木さんの作品について。** 土田さん：「写真の見え方はポートフォリオに比べると展示の方が良くなっている」。秋山さん：「他人の視線を意識していて、自らの驚きと感動が弱いように感じた。もっと一つ一つの細部への愛が感じられるとよかった」。姫野さん：「中途半端な作品に感じた。わが家とちょっと向き合っていけば写真もよくなるのでは」。増田さん：「ポートフォリオでは“大丈夫なの？”という印象だったが、展示作品は空間的にもよくなった。意外と写真としてのチカラがあるのでは」。鈴木さん：「面白い写真。普通の人は部屋が汚いことを隠したがるものだが、写真に撮って人に見せるといのは変わった状況だと思う」。

● **松本さんの作品について。** 土田さん：「もっとカメラが備えている特性を知った方がいい。自由に扱えないことの面白さを期待しないといけないと思う」。姫野さん：「現実世界の関係性を抜け出して新しい世界を構築することは、あまり新しいとは思わない」。増田さん：「彼の

作品の魅力は、日頃撮っている写真を読むこと、見ることに一つ一つのフィクションを試してみたこと。今回の展示ではインスタレーションが破綻していた」。秋山さん：「図形の持つ強さ、魅力が写真表現にある。一つ一つの作品は面白いが、並べ方でそれをうまく生かせなかった」。鈴木さん：「プレゼンで余計な事を言い過ぎた。ポートフォリオを見たときはイメージの強さを感じた」。

● **涼市さんの作品について。** 秋山さん：「カチッと決まった写真なのにランダムに展示したことでバランスが崩れてしまった。自らの体験を再現することに囚われずに整然と並べたほうがよかった」。鈴木さん：「故郷を思う気持ち、舞台を再現する方法、2つの表現が入り情報過多になった。インスタレーションが写真の質と合わなかった感じ」。土田さん：「崩れていくような展示の仕方を作者本人が自覚していないところが面白い」。増田さん：「ポートフォリオでは10点しかなかったが、それぞれ見応えがあってすくない印象を受けなかった。展示は写真1点1点をしっかり見せる方法ではなかった」。姫野さん：「写真には物語と現実を行き来する濃密さがあり、ひきつけるものがあった」。

● **宇田川さんの作品について。** 秋山さん：「照明器具自体を見せる展示の試みは中途半端に終わっていた。作品をもっと見やすくすべきだった。作品自体はよいのに残念だ」。土田さん：「展示作業は自分自身のマンネリに対する甘さが出た。作品1点1点は面白かった」。姫野さん：「ポートフォリオは意図が分かり、力強かった。展示で作者がやろうとしている繰り返していく作業は新しいことではない」。増田さん：「ユーモアのある人だと思う。プレゼンでそのユーモアを忘れて論理的に説明したのが失敗だった。蛍光灯の展示は作品を良く見せようという意図が感じられない」。鈴木さん：「展示作品は見づらい手が動いている。ユーモアがある。もう少し見てみたい」。



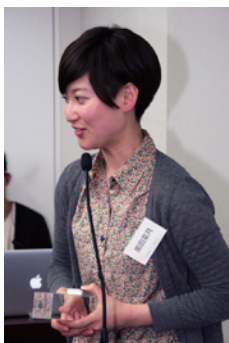
## ■ 審査員による投票

ファイナリストの作品について感想を聞いた後、各審査員がグランプリ候補を2名ずつ選んだ。結果は……

秋山／黒田 宇田川  
鈴木／黒田 宇田川  
土田／荒木 宇田川  
姫野／黒田 涼市  
増田／黒田 荒木

票を集計すると、黒田4票／宇田川3票／荒木2票／涼市1票

集計結果を受けて進行の菅沼が、4票の黒田さんと3票の宇田川さんに絞って議論することを提案。まず、姫野さんが「黒田さんはまだ発展途上の人だが、写真という大きな器の中で作品づくりをしている。人を真摯に撮ることから始めようとしている姿勢には伸びしろを感じる」と言えば、増田さんも「黒田さんの作品は展示でよく見えた。ポートフォリオ審査を経て、壁面に展示するという『1\_WALL』の流れの中で成長してきた。一年後の個展を見たいのは総合力で黒田さん」と続ける。一方、土田さんは「宇田川さんは一枚の写真作品をつくる上で重層的でしっかりとした作品をつくっている」と宇田川さんを推す。秋山さんも「今回の展示を優先すれば黒田さんだが、ポートフォリオでは宇田川さんが上だった。今後の期待票を入れて宇田川さんを推したい」と同意見。これで2対2となり、鈴木さんの発言が目目されたが「黒田さんの写真は外との関係性の中で生れた作品。宇田川さんは場を与えると何かやってくれそう。それぞれに良いところがあり優劣はつけがたい」と1人に絞れない様子。再度、各審査員に考えを聞いたが、結論は同じ。最後にもう一度鈴木さんの考えを聞くと「写真を撮る行為は何が起るかわからないところが面白い。カメラを持って外に出よう！というメッセージを込めて、黒田さん」と表明。これで黒田さん3票、宇田川さん2票に。これを受けて菅沼が「第8回写真『1\_WALL』グランプリは、黒田さんに決定！」と宣言し、審査会場がどよめきと拍手に包まれた。



## ■ 出品者インタビュー

## ● 黒田菜月

自分がグランプリという結果に、とても驚いています。ポートフォリオレビューから展示にいたるまで、自分の中で“なぜ写真を撮っているのか”“自分は何が好きなのか”を考え抜きました。その答えをこの展示でしっかり伝えられた結果を評価していただいたことがうれしいです。一年後の個展に向けて、不安も楽しみな部分もありますが頑張ります。ありがとうございました。

## ● 福田晋也

「1\_WALL」のプロセスは写真のトレーニングとして自分のためになったと思います。ただ、コンペで自分のやりたい事を理解してもらうのは難しいですね。もっと自由にやっていたらという起爆剤をもらった感じです。

## ● 荒木梨穂

腰が痛くなり会場へ行けませんでした。電話とはいえ自分の声でプレゼンできたことは良かったです。少しでも「1\_WALL」の雰囲気を楽しめた気がします。話した内容は緊張し過ぎて覚えていません。

## ● 松本明

プレゼンは0点ですね。まったく自分の思っていたことを伝えられませんでした。今後と同じ方向性でやっていきますが、根本的に意識を変えないといけないですね。今日はいろいろと勉強になりました。

## ● 涼市

台湾にいて、インターネットで「1\_WALL」の存在を知り、応募しました。ポートフォリオレビューから作品展示、公開最終審査まで、すべて貴重な経験でした。勉強することが多々あり、自分の写真について考えるいい機会になりました。

## ● 宇田川直寛

自分の作品に対して、いろんなアプローチの可能性を考えられたのが面白かったです。最後もう少しでグランプリというところまで行きましたが、コンペは選ばれるか選ばれないかだから、この先もまた1から作品をつくり続けます。

<文中一部敬称略 取材・文／田尻英二>